

ICTATLL JAPAN 2024 in Fukuoka
日本言語教育 ICT 学会 2024 研究大会 (福岡大会)

プログラム・発表予稿集



期日：2024年9月7日(土), 8日(日)
会場：久留米大学 御井キャンパス本館4階143
〒839-8502 福岡県久留米市御井町1635

主催：日本言語教育 ICT 学会
参加費：会員及び一般4,000円 学生2,000円

大会事務局：久留米大学 塩田裕明 研究室
Tel: 0942-43-4411 Fax: 0942-43-0574
e-mail: shioda_hiroaki@kurume-u.ac.jp

学会事務局：日本言語教育 ICT 学会 (赤瀬正樹)
〒381-8550 長野市徳間716 長野工業高等専門学校
Tel: 026-295-7033 Fax: 026-295-4950
e-mail: m_akase@nagano-nct.ac.jp
学会 HP: <http://ictatlljapan.jp/index.html>

学会 HP: <http://ictatlljapan.jp/index.html>

日本語教育 ICT 学会 2024 研究大会(福岡大会) プログラム

研究大会 1 日目： 9 月 7 日 (土)

受付開始： 12:30 (143 教室前)

総 会： 13:00 ~ 13:20 (143 教室) 開会式 会長挨拶 活動報告 会計報告 審議事項 その他

招待講演： 13:30 ~ 14:30

Reading Ability and Readability: Two Sides of the Same Coin

Trevor Holster (福岡女学院大学)

休 憩： 14:30 ~ 14:40

研究発表 I 143 教室 14:40 ~ 17:05

		司会：塩田 裕明 (久留米大学)
14:40 ~ 15:05	A Comparative Study of English textbooks of Japan and Iran: Focusing on Past Tense and Perfect Aspects ○張 世霞 (拓殖大学) 木村 恵 (早稲田大学大学院) 松本 陵磨 (福山大学)	
15:10 ~ 15:35	英語教科書における文章情報の可視化技術 — 談話標識に焦点を当てた比較研究への活用 — ○中野 明 (久留米工業高等専門学校) 塩田 裕明 (久留米大学) 國近秀信 (九州工業大学)	
15:40 ~ 16:05	日本とイランの初等中等英語教科書における過去と完了の扱われ方に関する研究 ○浅井 智雄 (福山平成大学) 松岡 博信 (安田女子大学)	
16:10 ~ 16:35	初級英語教科書におけるコーパス比較分析 — 「機能表現」に焦点を当てて— ○松本 陵磨 (福山大学)	
16:40 ~ 17:05	日本とイランの英語教科書比較— 助動詞に焦点を当てて— ○上西 幸治 (広島大学) 塩田 裕明 (久留米大学)	

閉会式及び諸連絡

事務局 赤瀬 正樹 (長野工業高等専門学校)

記念撮影 (予定) 17:20

(御井本館正面玄関前, 雨天の際は 143 教室内)

懇 親 会

19:00 ~ 21:00

案内・司会進行：塩田 裕明 (久留米大学)

研究大会 2 日目： 9 月 8 日 (日)

研究発表Ⅱ 143 教室 09:00 ～ 10:25

司会：中野 明 (久留米工業高等専門学校)	
09:00 ～ 09:25	イランと日本における英語教科書の比較分析 —To 不定詞に焦点を当てて— ○北野 功樹 (日本工業大学) 保坂 芳男 (兵庫大学) 松本 陵磨 (福山大学)
09:30 ～ 09:55	リーダビリティと語彙分析ツールを利用した日本とイランの英語教科書分析 ○赤瀬 正樹 (長野工業高等専門学校) 銚之原 秀平 (九州学院中学校・高等学校) 渡辺 清美 (福山平成大学)
10:00 ～ 10:25	日本とイランの初級英語教科書における機能表現の取扱と教科書設計のコーパス比較分析 ○松本 陵磨 (福山大学) 中野 明 (久留米工業高等専門学校) 本田 良平 (福山平成大学)

閉会行事 10:30 ～ 10:40 副会長挨拶 保坂 芳男 (兵庫大学)
諸連絡 事務局 赤瀬 正樹 (長野工業高等専門学校)

《会場案内・交通案内》（大学HPより）

久留米大学前駅[出口]から徒歩約9分



1	700号館	10	800号館（御井メディアセンター）
2	600号館	11	1000号館
3	500号館	12	900号館
4	御井本館	13	千歳会館
5	御井図書館	14	第2体育館
6	第1学生部室棟	15	第3学生部室棟
7	第2学生部室棟	16	インターナショナル・ハウス
8	御井学館	17	みいアリーナ
9	御井学生会館	18	学生寮

キャンパス地図： <https://www.kurume-u.ac.jp/soshiki/3/mii-campus.html>

《懇親会》

会 場：佐々樹

(<https://www.hotpepper.jp/strJ000565965/>)

住所：

日 時：2024年9月7日（土）19:00 ～ 21:00

会 費：5500円（飲み放題付き）

日本語教育 ICT 学会 2024 研究大会(福岡大会) 発表予稿集

《招待講演》

143 教室 13:30 ~ 14:30

演題 : Reading Ability and Readability: Two Sides of the Same Coin

Trevor Holster (福岡女学院大学)

概要 :

It is common to grade reading material for both first and second-language learners by reading level. This requires assessing the reading ability of the students and measuring the readability of the text, but there are many different scales of readability and it is often not clear how to match reading ability with readability. In this presentation I will first discuss reading ability, in particular the role that fluency and automaticity play in being a skilled reader. I will then review different reading processes and the role of process flexibility – the ability of skilled readers to switch between different reading processes according to the requirements of the reading task. Finally I will look at a range of readability scales, including the Flesch-Kincaid reading ease scale, the Yomiyasusa scale, and the Lexile scale, each of which used a different methodology to estimate readability. The Lexile scale was groundbreaking in that it used Rasch analysis to map reading ability and text readability onto a common measurement scale. Rasch analysis is now the most commonly used type of analysis in language testing but is much less well-known outside of the field of test analysis so I will give a brief conceptual overview and show how it can be used to match student reading ability to text readability levels.

講師紹介 :

Trevor Holster is a language instructor at Fukuoka Jogakuin University and is a former editor of *Shiken: JALT Testing and Evaluation SIG Newsletter*. He has a Masters degree in Applied Linguistics from the University of Southern Queensland and a Professional Certificate in Language Assessment from the University of Melbourne. He has taught English in Japan since 1996 and his research interests include measuring the difficulty of extensive reading materials, vocabulary acquisition and assessment, peer assessment, and speaking assessment.

《研究発表》

研究発表 I 143 教室 14:40 ~ 17:05

14:40 ~ 15:05

A Comparative Study of English textbooks of Japan and Iran:
Focusing on Past Tense and Perfect Aspects

○張 世霞 (拓殖大学) 木村 恵 (早稲田大学大学院) 松本 陵磨 (福山大学)

Abstract:

Three types of English textbooks for Japanese elementary and junior high school were analyzed with AntConc. Similarly, Iranian English Text (Junior Grade 1-3, Senior 1-3) were also analyzed. Simple past tense and present perfect tense aspects were focused on in this study.

The simple past tense was found in Books 6 of elementary textbooks of New Crown, Sunshine and New Horizon which indicated that the simple past tense is introduced from Grade 6 of elementary school and is taught systematically to elementary students in Japan. The simple past tense was found in Prospect 3 of junior high school textbooks of Iran, which indicates that Iranian students study past tense later than Japanese students.

The present perfect tense was found in Grade 2 of New Crown and Sunshine which indicates that the present perfect tense is mainly introduced in Grade 2 syllabus of Japanese junior high school. The present perfect tense was found in Vision 2 of elementary Iranian English Text for Grade 2 of senior high school.

15:10 ~ 15:35

英語教科書における文章情報の可視化技術
— 談話標識に焦点を当てた比較研究への活用 —

○中野 明 (久留米工業高等専門学校) 塩田 裕明 (久留米大学) 國近秀信 (九州工業大学)

概要:

1. 研究の背景と目的

英語習得のための教材は多数あり、それぞれに特徴がある。選んだ教材を長く使い込むことで、その教材の特徴や物足りない所が見えてくることは珍しいことではない。そのため教材の選定や、教材を活用した授業や資料の作成、教材の改善を目指すとき、教材の特徴を容易に把握する技術の存在は有用と考える。本研究では、文法や単語の教材中の使用状況を把握するための可視化技術の提案とツールの開発 (以後、可視化ツール) を行った。また、具体的に、談話標識に焦点を当てて、4種類の教科書の分析を可視化ツールを活用して行った。

2. 研究の方法

可視化ツールの処理工程は、大きく 3 つの段階で構成されている。①教科書の英文を出現した順になぎ合わせたリストを作成する。②可視化させる項目に関連する単語に正の数値を、関連しない単語には 0 の数値を与える。③数値に色を割り当てて格子状に表示させる。②の処理を、可視化の対象に応じて変えることで、様々な分析に活用することができると考える。また、与える数値や色を工夫することで、項目の種別や、項目群の可視化も可能と考える。

3. 談話標識の分析への活用実験

11種の群に分類される100以上の談話標識を可視化の対象とし、活用実験を行う。分析の対象の教科書は、日本、スリランカ、ミャンマー、イランの4カ国の中学3年生、または、同等学年のものを使用した。談話標識の分析には、本研究で可視化ツールが示す情報だけでなく、出現頻度を用いたコレスポネンス分析も使用し、可視化情報と頻度情報との総合的な分析を行った。

4. 結果

活用実験の結果、教科書に対して分析したい項目の頻度のみならず、それ以外の情報、例えば、項目の初出時期や、密集度合い、分散度合い、反復提示の状況、提示バリエーションの状況なども直感的に捉えることができ、頻度集計のみでは把握し難い情報を捉えることに成功できたと考える。

15:40 ~ 16:05

日本とイランの初等中等英語教科書における過去と完了の扱われ方に関する研究

○浅井 智雄（福山平成大学）松岡 博信（安田女子大学）

概要：

1. 研究の背景

日本人学習者が習得に困難を感じる文法項目は先行研究でもいくつか指摘されてきている。その一つとして過去と完了がある。教科書の特定の文法項目の配列状況を検討することは労力を要するものであるが、過去と完了に関して分析できれば指導と学習の在り方に何らかの手掛かりが得られることが期待できる。さらに、国際的観点から比較分析ができれば、相対的立場から日本の教科書の在り方も再検討できる。

2. 研究目的

EFL環境にあるイランと日本の初等中等英語教科書を過去と完了の点から比較分析することによって、これら2つの項目の配列状況を明らかにすることを目的とした。(1) 過去と完了の初出学年と提示状況、(2) 過去と完了の各学年における頻度数の推移、(3) 各学年で過去と完了が最初に出現している状況のおおよその傾向を明らかにすることを研究課題とした。

3. 研究方法

イランの中学1年から高校3年及び日本の小学校5・6年、中学1年から3年までの英語教科書をテキスト化した後、言語分析ソフト AntConc を用いて、過去と完了に関するパターンを検索し、研究課題に応じて、グラフ、数値または英語から構成された配列状況一覧表を作成した。

4. 結果と今後の課題

過去と完了両方において、日本の方が早期に日常的话题をテーマとして登場させている。難易度が高い「現在完了進行形」がイランでは登場せず、日本の中学3年で登場している。規則動詞、was、have+過去分詞において、イランでは、初出学年で大量のインプットを試みる傾向が見受けられる。中学3年を比べた場合、has+過去分詞、have been+過去分詞を除いて日本では全てのパターンが網羅されているのに対して、イランでは、was 及び were のみ扱われている。以上から、日本の教科書は系統的学習が十分可能のように作成されていると言える。習得過程が教科書でどのように提示されているかということ进行分析することが今後の課題の一つとして考えられる。

16:10 ~ 16:35

初級英語教科書におけるコーパス比較分析 — 「機能表現」に焦点を当てて—

○松本 陵磨 (福山大学)

概要 :

この論文は、日本の小学校および中学校で使用されている主要な3種類の英語教科書における機能表現の取り扱われ方を比較分析し、その出現パターンや量的変化を明らかにし、さらにハリデーの言語機能理論と比較することを目的としている。本研究は、機能表現の理解を深め、それが英語習得にどのように貢献できるかを明らかにするものである。

研究の基盤となる機能表現の概念は、ハリデー (Halliday 1975) の定義を用い、テキストデータの分析には自然言語処理技術を用いたテキストマイニングを採用した。これにより、用語の頻度、出現パターン、および言語的特徴を抽出した。また、出現する機能表現とハリデーの言語機能理論における「7つの言語機能」との関連性を検討した。

特に、機能表現の多様性や出現量の変化を分析し、そのパターンを明らかにした。そして、ハリデーの言語機能理論に基づく7つの言語機能の中で、特に目立つ機能やその有効性について検討した。分析結果については、学会発表時に詳述する予定である。

本研究は、機能表現を適切に配分することにより、英語学習者の学習効果を向上させる教科書設計の基盤を築くものである。

16:40 ~ 17:05

日本とイランの英語教科書比較—助動詞に焦点を当てて—

○上西 幸治 (広島大学) 塩田 裕明 (久留米大学)

概要 :

本研究では、日本の3種類の小学校5, 6年及び中学校の英語教科書とイランの初等学校5年間の英語教科書における文法項目「助動詞」に焦点を当てて、比較・検討を行い、英語教科書作成及び英語教育推進のために貢献できる内容を模索することを目的としている。

比較対象とする日本の小学校・中学校英語教科書は、小学校5年生から中学校3年生までの5年間の英語教科書「New Horizon」「New Crown」「Sun Shine」、そしてイランの場合は中学校3年間と高校3年間の英語教科書「Prospect」及び「Vision」を対象として分析・検討を行った。

その結果、日本とイランの英語教科書を比較した中で、全体的な頻度数に関しては以下のことが分かった。イランの英語教科書も日本の3種類の英語教科書においても、頻度数が一番多いのは助動詞 **can** であり、2番目が **will** であった。しかも、どちらの国でも、助動詞 **can** は極めて頻度が高かった。3番目に頻度数が多かったのは、日本の英語教科書に関しては、New Horizon と Sun Shine では **would** であったが、New Crown は **could** であった。一方、イランの教科書では助動詞 **may** であった。

これ以降の助動詞の学年別の導入や頻度数の分析及びその考察等の詳細に関しては、研究発表の場で述べる。

09:00 ～ 09:25

イランと日本における英語教科書の比較分析

—To 不定詞に焦点を当てて—

○北野 功樹（日本工業大学）保坂 芳男（兵庫大学）松本 陵磨（福山大学）

概要：

1. 研究目的

本研究は to 不定詞に焦点を当て、日本とイラン・イスラム共和国（以下、イランと略す）で使用されている教科書を比較することにより、日本における英語教育推進及び教科書作成のための示唆を得ることを目的とする。具体的には次の3点を明らかにする。

- (1) イランの中学校英語教科書で、to 不定詞はどのように教えられているか。
- (2) イランの高等学校英語教科書で、to 不定詞はどのように教えられているか。
- (3) 日本とイランの教科書にどのような違いがあるか。

2. 研究方法

日本の教科書分析は小学校5年生から中学校3年生の5年間、イランは中学校1年生から高等学校3年生までの6年間を対象とした。教科書をデジタル化したのちに to 不定詞が出現する文を抜き出し、コーパスを作成した。その後、作成したコーパスを用いて量的な分析と質的な分析を行った。

3. 結果

イランの教科書を量的に分析した結果、高等学校1年生で to 不定詞の出現回数が大幅に増加することが明らかになった。イランでは高等学校2年生で文法項目として to 不定詞が紹介されており、文法項目として扱われる前段階での大幅な増加は日本の教科書には見られない傾向であった。質的分析の結果、中学校の教科書では、1年生で名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法（目的）、慣用表現 “Nice to meet you (, too).” が初出し、中学校3年生では疑問詞 (Wh-) + to do、形式主語が初めて出現している。高等学校の教科書では、2年生で副詞的用法の原因が初出ししている。英語教育導入1年目の教科書で3つの用法全てが出現するのはイラン（中学校1年生）だけであり、日本は中学校2年生（導入4年目）で全ての用法が出揃う。その一方で、副詞的用法（原因）に関しては、イランの教科書では高等学校2年生で初めて出現し、中学校2年生で初出する日本の教科書よりも後の出現であった。その他の詳細なデータ分析の結果は学会当日にお示ししたい。

09:30 ～ 09:55

リーダビリティと語彙分析ツールを利用した日本とイランの英語教科書分析

○赤瀬 正樹（長野工業高等専門学校）銚之原 秀平（九州学院中学校・高等学校）
渡辺 清美（福山平成大学）

概要：

本研究は、日本とイランの英語教科書のリーダビリティと語彙レベルを調査し、比較・検討することを目的とする。日本では、小学校外国語科としての英語が5年生から、イランでは、英語が教科として正式に中学校1年生から開始されている。本研究の分析で使用する教科書コーパスは、日本では、CROWN、NEWHORIZON、SUNSHINE シリーズの小学校5年～中学校3年の5年分である。イランでは、Prospect 1～3（中学1～3年）、Vision（高校1年～3年）の6年分である。

まず、それぞれの教科書コーパスから、延べ語数、異語数、標準化 TTR を求めた。日本とイランの教科書は共に学年を経るに従って、上昇していることが分かったが、日本の教科書では使用語彙の多様性が学年によって上下しているのに対し、イランの教科書では、ほぼ一貫して語彙の多様性が徐々に増えていることが分かった。リーダビリティ分析に関しては、日本とイランの教科書共に学年を経るにつれて、読みやすさの観点で非常に平易なレベルからやや平易なレベルへと変化していったが、イランの教科書の方が日本の教科書よりも段階的に英文レベルを引き上げており、学年間の差の変動が緩やかであった。

教科書コーパスの語彙分析では、New Word Level Checker (Mizumoto, 2021) で使用可能な JET2020 (Japanese English Textbooks 2020) を判定基準として用いた。日本では、小学校から中学校に移行する段階で教科書の語彙数が急に上昇している一方で、イランでは、中学校から高校段階で語彙数の上昇が見られたものの、段階的な語彙数の引き上げが確認された。また、特徴語分析では、日本もイランも名詞が最頻出で、学年を経るにしたがってその出現頻度数が増えていっているものの、日本では日常的、異文化的な語が顕著になっていくのに対し、イランでは、自国に焦点を当てた語や固有名詞、品詞に関する語が増えていくことが明らかとなった。詳しいデータの分析結果と考察については学会当日の発表時に示すこととする。

10:00 ~ 10:25

日本とイランの初級英語教科書における機能表現の取扱と教科書設計のコーパス比較分析

○松本 陵磨 (福山大学) 中野 明 (久留米工業高等専門学校) 本田 良平 (福山平成大学)

概要：

本論文は、日本の小学校・中学校とイラン・イスラム共和国の初等教育の英語教科書における機能表現の取り扱われ方に着目し、出現パターンや量的な変化を比較分析した上で、ハリデーの言語機能理論との比較検討をするものである。本研究は、機能表現の探求をより効果的にし、結果、英語習得の過程にどのように役立てることができるのかを明らかにしたものである。

本研究の基盤となる機能表現の概念は、ハリデー (Halliday 1975) が定義したものをを用いた上で、テキストデータを自然言語処理技術で分析し有益な情報を抽出するテキストマイニングを用いた分析により、用語の頻度、出現パターン及び言語的特徴を抽出した。さらに、出現する機能表現について、ハリデーの言語機能理論における「7つの言語機能」との関連性を分析し検討を行った。

特に、機能表現の多様性の変化、出現の量的な変化を分析し、出現パターンを割り出した上で、ハリデーの言語機能理論における7つの言語機能のうち、突出する機能やその有効性を分析し検討を行った。なお、分析結果は、学会発表時に述べる。

本研究は、異なる種類の機能表現をバランスよく取り扱い、出現パターンと量的なバランスを工夫することにより、学習者の英語学習効果の向上に貢献できる教科書のデザインについて、その基礎研究となるものである。